

# CONCERT

## 3月

コンサート、イベントから

# EVENT

### Opera キリル・ペトレンコ指揮バイエルン州立歌劇場の《ばらの騎士》

1972年にカルロス・クライバーの指揮で初演されたオットー・シェンク演出の《ばらの騎士》は、46年経った今でも、第2幕の舞台が現れるだけで拍手が起きるほど有名なプロダクションだ。

今年の上演はカーネギーホールで行われる演奏会形式の上演を控え、キャストも北米出身者を多く入れて一新した。外国人が操るウィーン訛りのせいも、第1幕は退屈な時間が過ぎた。さすがのキリル・ペトレンコも、再演では稽古時間が十分に取れなかったのだろう。その窮地を救ったのは、歌手役のローレンス・ブラウンリーの甘い歌声だった。それまで抑え気味だったアドリアンス・ピエションカが歌う元帥夫人も、アリアにおいて、ピアノシモのオーケストラと彼女の歌い出しがピタッと合ってから流れが変わった。しかし、幕切れは、元帥夫人の召使たちやコンサートマスターまでもが、仕舞い込んでいた間の埃を払いながら演奏しているようだった。

ところが休憩を挟んだ後は、ペトレンコが完全に掌握した舞台運びとなり、オックス男爵のピーター・ローズも、本領を発揮し、ファルスタッフのような主役級のオーラを見せた。ゾフィー役の評判が定着しているハンナ＝エリザベス・ミュラーも好演し、引っ張られるようにオクタヴィアンのアンジェラ・ブローワーも自信が表れ始め、カーテンコールでは感極まっていた。

第3幕の冒頭のオーケストラ部分と第1幕には課題が残るが、あと4回の公演でしっかり練り上げて、ペトレンコたちのカーネギーホール・デビューを飾ることだろう。(3月9日所見) (中東生)



キャストを一新したバイエルン州立歌劇場《ばらの騎士》から